

●第14回第2回公開講座「各教科等の特性に応じた授業づくり ～主体的・対話的な学びを目指して～」

平成29年10月15日（日）に、教科等の指導法について理解を深めることをねらいとして、第2回公開講座を行いました。塾生が作成した学習指導案に基づき、教科等に分かれて模擬授業と協議を行うとともに、15人の統括指導主事及び指導主事からの指導・助言を受けました。今回は、教職に就くことを志す大学生に講座を公開し、関係大学の学生を中心に約250人が参加しました。

塾生は、この日に行う模擬授業のために6月から各班で準備を進めてきました。当日は、15班で9教科の授業が行われ、塾生全員で力を合わせて検討を重ねた授業を生き生きとした表情で行っていました。

今回の模擬授業を通じて、塾生には日々の授業をつくり上げていくことの重要性を意識し、今後の授業により磨きをかけることを期待しています。

【塾生の感想より】

- ・6月から模擬授業の内容の検討を行ったことで教材研究の奥深さを感じた。この経験を教師生活に生かしていく。
- ・他の班の授業づくりを参観し、他の塾生の取組に刺激を受けるとともに、教科や領域について学ぶことができた。



－理科の振り子の実験－



－国語・算数の授業－

【参加した学生の感想より】

- ・教科の特性や新学習指導要領が盛り込まれた模擬授業や配布資料の内容がとても参考になった。
- ・充実した模擬授業の内容と塾生の方々の生き生きとした姿から教職の素晴らしさを実感した。

●第15回講座「教員のメンタルヘルスについて」

平成29年10月28日（土）に、メンタルヘルスについて理解するとともに、組織の中で仕事をする際のメンタルヘルスの保ち方について学ぶことをねらいに、第15回講座を行いました。公益社団法人教職員互助会 三楽病院 精神神経科 部長 真金 薫子 様をお招きして、「教員のメンタルヘルスについて」をテーマに、経験年数ごとの傾向や職場で心掛けることについてお話をいただきました。講義後の班別協議では、昨年度の修了生を招き、メンタルヘルスの保ち方について理解を深めました。

【塾生の感想より】

- ・教師になった際に抱える悩みの要因について知り、その予防法や対処法を学ぶことができた。自分の感情や考え方について今後に生かしていきたい。
- ・修了生との班別協議を通して、自分が特別教育実習で悩んでいることは、誰もが悩むことであると気づき、前向きな気持ちが湧いてきた。



－修了生と塾生の班別協議－

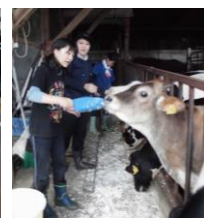
●企業等における体験活動

企業等での就業体験を通して、社会人としての責任ある態度を身に付けることをねらいに、7月上旬から9月上旬にかけて、3日間の企業等における体験活動を実施しました。今年度は、17の企業・事業所に御協力をいただきました。

塾生は、各企業等で企業理念やマナーに関する研修、店舗での接客、納品作業、発注業務等の様々な体験を通じて、社会人としての責任や相手の立場に寄り添うことの大切さなどを学びました。12月の班別協議において、体験活動のまとめとして、各自の取組について情報交換を行います。

【塾生の報告書より】

- ・体験活動で学んだ「お客様第一」「売り場は舞台」「先を見通した行動」は、全て教職に置き換えることができ、今後に生かしていきたい。
- ・体験活動先の方は、努力をして困難や苦勞を乗り越えながら、やりがいや誇りをもって働いていた。自分も教師としてその姿勢を大切にしていきたい。



◆ ◇授業づくりのポイント⑥（指導方法・指導技術を身に付ける）◆

東京教師養成塾教授 水野 久美恵

授業は、子供が主体的に学ぶことができることを念頭において考えます。そのためにも、子供の問いや気付きから、子供自身でめあてが立てられるように導入を工夫したり、主体的に学ぶ活動ができるような展開やまとめを工夫したりすることが欠かせません。子供が授業を楽しみにし、学ぶことが楽しいと思える授業、子供が自ら授業を作り上げ、自ら学ぶことができるような授業を行うためには、教師として指導技術を身に付け、高める努力を続けることが大切です。

その基盤に、教師としての「構え」をもつことが大切です。いくつもありますが、二つ紹介します。一つは、自分を振り返ることのできる目標を設定することです。

昨年度のある班の塾生は“TRY”を班目標に設定し、口癖のように言葉にして行動の指針としました。今でも拠り所としていると聞きます。

T：“Think it over.”「熟考しなさい」 R：“Respect others.”「他人を尊重せよ」

Y：“You can do it.”「自信をもって」 TRY：“Try one’s best.”「全力を尽くす」

もう一つは、自分に限界を決めないで一つ一つを着実に積み重ねることです。

本年度のある班の塾生です。10月の公開講座（模擬授業）に向けて4月後半から学習指導案作りに取り組みました。指導書や実践例をそのまま使おうとしたところ、「根拠は」と聞かれて、学習指導要領、学習指導要領解説を読み込みました。単元の目標の拠り所としたのも学習指導要領です。単元観や評価規準は、改めて設定しました。学年の横・縦の系統を調べ、既習事項は何か、単元での学びは何か、次にどう発展するのかなど、学習指導案を一から作り上げました。途中、限界を感じたこともあったはずですが、しかし、そこを乗り越えて授業研究をすることの本質的な楽しさに気付くことができました。班全員が一丸となって、質疑応答を含んだ1時間の授業に必要なことを準備しました。当日は達成感に満ち溢れた塾生たちのいい笑顔がありました。

前進しましょう。授業を子供主体で考え、本気になって追究する教師であって欲しいと願います。

◆ 子供のよさを引き出す ◆

東京教師養成塾教授 青木 秀雄

学校においては「子供のよさ」という言葉がよく用いられます。このことについて、大阪教育大学 教授 松本勝信 先生は、次のように書いています。「『子供のよさ』を大切にすることとは、相対的に子供同士を比較して、個人間の優劣差としてそのよさを読み取るということではなく、一人一人の子供のその子らしさを読み取ることを大切にしようとするものと言える。それは人間としての高まりとして共有する面と、一人一人の個性となる分有する面の二面から捉えられることが望ましいと言える。—中略— また、一人一人の個人内で何がよくできて何がそうではないかというような個人内の相対比較をしたりしてよりよくできるものを探すものでもない。一人一人のよさを捉えるということとは、相対的に何かよりよくできるものを探すものではない。」そう考えると、「よさ」とは相対的な概念ではなく、それは「高まり」であったり、「個性（特徴）」であったりするものと言えます。40年前私が初任者の頃、先輩から「美点凝集法」という言葉を教えていただいたことを思い出します。「短所」の是正も必要ですが、「長所」をより伸ばさせることで、「短所」も底上げされることが期待できます。肯定的な評価で子供は自ら伸びようという意欲を高めるのだと言えます。菊池 省三 先生は「ほめ言葉のシャワー」という言葉で、教師が「価値ある行為」を褒めることの重要性を指摘しています。もちろん毅然とした態度の前提があつてのことです。

教師として子供一人一人の「よさ」を見取っていくためには、次のことが大切になります。

- (1) 子供の多様な「よさ」を見付けるために、柔軟で多面的な評価の視点をもつ。「よさを見付ける。」
- (2) 子供の僅かな成長であっても見逃さない評価眼をもち、それを子供に返す。「よさを認める。」
- (3) 子供に内在する「見えないよさ」を「見える化（可視化）」する。「よさを引き出す。」
- (4) 子供自身が自分の「よさ」をさらに高めていくために具体的な支援を行う。「よさを高める。」

子供が自分の「よさ」を自覚できれば、それはその子自身の自尊感情を高めることになり、さらにはその「よさ」を自ら伸ばそうとする意欲や態度につながっていきます。限定的で固定的な評価観から脱却し、子供一人一人の可能性を丁寧に見出していくことが大切です。塾生には、様々な場面を通して子供一人一人の成長を丁寧に見取ることによって、子供の意欲を引き出したり、友達によさに気付かせたりすることができるような教師になってほしいと願い、日々指導しているところです。